

オンライン大学におけるインタラクティブな教育の実践と学修への影響に関する一考察

A Study on Practice of Interactive Education and Influence in Learning at Online University

中村 宏^{*1}, 森 佳奈枝^{*1}

Hiroshi NAKAMURA^{*1}, Kanae MORI^{*1}

^{*1}東京通信大学 メディア教育支援センター

^{*1} Media Education Research Center, Tokyo Online University

Email: nakamura.hiroshi@internet.ac.jp

あらまし：高等教育の教場として通信教育のニーズは年々高まり、ICTの利活用によって大人数の学習者を対象とした多様かつ個々の要望に応じた教育が可能となってきた。本稿では、メディア授業を中心としたオンライン学習支援システムを用いて通信教育を行なっている東京通信大学の実践を例に、配信期間内にオンデマンドで学ぶ映像講義において相互作用するインタラクティブな教育が学修に与える影響を考察し、展望していく。

キーワード：通信教育、映像教材、eラーニング、SPOC、Instructional Design

1. はじめに

ICT環境の整備に伴い、大学通信教育においてもインターネットを活用することで、スクーリングの代替として、動画配信での講義や双方向通信でのディスカッション、専用ソフトウェアを用いた演習や試験を実施する、eラーニングによる「オンライン授業」での通信教育を行なう大学が増加している。

本稿では東京通信大学の実践を例に、配信期間内に学生がオンデマンドで学ぶ映像教材を中心とした授業において、相互作用するインタラクティブな教育が学修に与える影響を考察する。

2. 東京通信大学における通信教育

東京通信大学(1) (以下、本学) は2018年に開学したメディア授業を中心とした通信制大学である(2)。いつでもどこでも学べる「学びの機会」を開放し、知識とそれを活用する「智慧」を習得し世代を問わず生涯を通じて活躍できる優秀な人材を育てることを目的とし、社会的ニーズの高まりが予測される情報技術人材と福祉人材の育成を目指して、情報マネジメント学部と人間福祉学部の2つの学部が設立された。

本学の教育課程は4年間の修業年限、4学期制、単位制で、各授業科目は1単位を45時間以上の学修を必要とする内容で構成されている。基本的には8回の授業回を受講し、単位認定試験を受験して、総合的に合格点を取ることで1単位が認定される。授業は一部科目のスクーリングによる演習・実習を除いて、動画配信を中心として行なう「メディア授業」で構成されている。1授業回は、約15分の映像教材を4講受講した後に、小テストを受験することを基本とする。科目によっては小テスト以外に、演習課題のレポート、ディスカッションへの参加等が課せられる。

本学の学生が学修を進めるために必要な手続き等はオンラインキャンパス「@CAMPUS」を通じて行なわれる。またそこからアクセスするオンライン学習支援システム「@ROOM」がメディア授業受講の場となる。@ROOMは履修中の授業を受講するLMS (Learning Management System) と、日々の学修状況や活動、履修登録や成績管理、単位修得状況などを確認できるeポートフォリオの2つの機能で構成されている。@ROOMはPCのWebブラウザのほか、専用アプリをインストールすることでスマートフォンなどのモバイル端末での受講も可能である。授業出席や試験の受験に際して、なりすまし防止を図るため、顔認証システムを導入している。



図1 @ROOMでの映像教材の一例(PC)

3. オンラインでのインタラクティブな教育

本学のメディア授業は配信期間にオンデマンドで受講できるため、非同期であり、授業の双方向性の確保が重要となる。そのためLMSの機能及び教職員の運営体制により、学生からの質問や問合せには24時間以内の回答を目標として、学生の多様な状況やニーズに合わせてコミュニケーションを取ることができるよう工夫し、継続的な学修を支援している。

3.1 アカデミック・アドバイザー

大学通信教育は通学教育と比べて、学習者が孤独な学習に陥りがちで、学習プランの構築や学習意欲の維持に、学習者個々が問題を抱えることがある。

本学では専任教員によるアカデミック・アドバイザー制度（以下、AA）を導入し、履修計画や学習方法について相談に乗り、指導を行なっている。AAは1学年約20人の学生を担当し、それぞれの目標や学修履歴に応じてアドバイスをを行なう。東京キャンパス（総合校舎コクーンタワー）や名古屋、大阪のサテライトキャンパスにおける対面での指導のほか、電話やSkype等を用いた面接指導、LMS上のメッセージや掲示板（BBS）での質疑応答等、多様な手法を用意している。

AAは受動的に学生からの質問に答えるだけでなく、学生に履修のアドバイスをを行なう。2019年度1学期には、学期の中間時点で受講の進んでいない1年生に対して履修指導のメッセージを送信したところ、学生との対話の頻度が高まり、受講率の増加につながった。

AAは、2年次以降も継続的に学生の支援を行なっていくが、学生が自らeポートフォリオを活用して学修状況を正しく把握し、自律的な学修を行なえるように指導していく。

3.2 科目担当教員と指導補助者

本学はメディア授業が主体であり、講義を収録した映像教材等の各種教材は事前に用意しているため、科目担当教員は開講中、LMS上のメッセージや授業掲示板に学生が書きこんだ質問や意見を把握し、回答や指導内容を返信することが中心となる。メディア授業は多人数の履修が可能であり、原則履修者数に制限を設けない。そのため、学生数や授業形態に応じて指導補助者（以下、TA）を配置し、担当教員と連携しながら回答する体制とすることで、学生の質問を受け付けてから教員が回答するまでの時間を短縮させ、授業の双方向性の確保している。1年次配当必修科目の「学術研究の本質」では授業掲示板の学生投稿86件のうち、教員やTAからの回答が必要なものに対して返答までに要した平均時間は11時間39分であった。なお学生の投稿が深夜の場合や、学生の問合せから教材資料の補足や修正が発生した場合で回答までの時間が長くなる傾向があった。

TAは学生への教育指導の一次対応のほか、質問内容の分類、LMS掲示板の管理、添削や採点の補助、出席状況や学修進捗が遅れている学生へのメール問合せ、eラーニング教材の作成補助、教員の指示に基づいた演習問題の解決指導等の授業補助を行なう。

本学でのeラーニングによる通信教育において、TAは必ずしも校舎から授業補助を行なう必要はなく、遠隔での業務も可能であり、時間や場所に縛られずに業務にあたることができる。



図2 授業掲示板の一例（PC）

3.3 学内 SNS

本学では@CAMPUS や@ROOM を用いて、学生が積極的に授業へ参加する環境を構築している。更に Yammer(3)を学内 SNS として用いることによって、より多様な学生と教職員及び学生間のコミュニケーションを実現した。Yammer は学生、教職員とも自由参加としており、グループも利用者が自主的に作成しているが、そこでは学生同士の協調学習や教員による授業の補足説明のほか、サークル活動も行なわれており、オンラインのバーチャルキャンパスとして機能している。

3.4 課外教育

本学人間福祉学部では、社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験の受験資格を取得できるカリキュラムが用意されている。理論と実践を連関させるべく入学年度より資格要件となる演習科目を受講することを推奨しているが、課外においても一年次より国家試験を意識してもらうべく、当該資格を有する教員によって定期的にコンテンツを配信している。

4. 課題と展望

メディア授業を中心としオンライン学習支援システムを用いて通信教育を行なっている本学では、授業の双方向性の確保のため、メッセージや授業掲示板を活用し、多様かつ個々の状況に応じた教育を実践している。学生の学習意欲の維持し卒業まで導くため、指導や相談の体制を充実し、オンライン学習支援システム「@ROOM」等の機能を改修して、教員の授業準備や学生の学修活動の支援に柔軟に対応していくことが、今後の課題となる。

参考文献

- (1) 東京通信大学: “東京通信大学 - 人生に新しい大学を”, <https://www.internet.ac.jp/> (2018)
- (2) 中村宏, 森佳奈枝, 加藤泰久: “オンライン大学におけるメディア授業を中心とした通信教育の概要と学習者の動向” 第43回教育システム情報学会全国大会, pp.371-372, (2018)
- (3) ソーシャル・ネットワーク・サービス, Yammer, <https://products.office.com/ja-jp/yammer/> (2018)